

# ピアレビューを活用した授業レポートの 「二回提出」方式の効果

— アクティブラーニングの試みとして —

Effects of 'Submit Twice' method for term paper through peer reviewing  
— As an example of Active Learning —

中 西 裕

## 概要

本研究は、大学の授業における授業レポート（期末レポートや提出作品）の提出ならびに評価方法に関する提案である。総括的評価の評価材としてレポートを1回だけ提出させるのは一般的に行われているが、これに対して、いったん提出したレポートを学習者相互でピアレビューし、その結果を受けて加筆改善したうえで2回目に最終提出とするのが「二回提出」方式である。

本研究では、筆者が担当する二つの授業において、レポートの「二回提出」方式を導入してその効果を多面的に検討した。その結果、二回提出を行うことでレポートの質は全体に向上するが、それは必ずしもピアレビューでの確かな指摘を受けたからというばかりではなく、他の学習者のレポートを数多く目にすることで自分のレポートの欠点に気が付くという間接的効果も大きいことがわかった。

ただ一方、「二回提出」方式では、提出のチャンスが二回あることでその一方に手を抜くといった問題も、少数ながら発生することもわかった。

この方法は、比較的容易に導入でき、総括的評価の評価材を形成的評価にも活かすことのできる、効果の高いアクティブラーニングの一例である。

## 1. はじめに

米国の教育心理学者 B.S. ブルーム (Bloom, Benjamin Samuel) は、完全習得学習理論 (mastery learning) を提唱し、その過程における学習評価を「診断的評価」、「形成的評価」、「総括的評価」に分類した<sup>[1] [2]</sup>。学習前に診断的評価を行って学習者のレディネスを確認して指導方針を立て、学習の過程で形成的評価を行って学習へのフィードバックを行い、最後に総括的評価を行って学習の成果を測定することで学習が完成する。現在一般に、診断的評価は「プレースメントテスト」「レディネステスト」、あるいは授業の事前アンケートといった形で行われ、形成的評価は「理解度確認テスト」、「小テスト」、「添削」、「ふり

かえり」といった形で実施されることが多い。総括的評価としてはペーパーテストが一般的だが、大学教育においてはペーパーテストと並んで一般的な評価材がレポートである。

本研究では、総括的評価の評価材である期末レポートに形成的評価の意味合いと効果を加える方法を提案し、その効果を検討することを目的とする。具体的には、筆者の担当する「基礎ゼミナール」ならびに「情報と文化」の授業において、期末レポートの二回の提出の間に学習者相互による多数のピアレビューを実施して最終提出に至る方法を試みた。学習者による相互評価を導入することの効果はかねてより指摘されているが<sup>[3][4][5][6][7]</sup>、本稿では特に期末レポートに相互評価を組み合わせた「二回提出」方式の実施過程を紹介し、その効果について多面的に検討する。

一般に学生どうしのピアレビューにおいては、そのレビューに玉石混淆というべき質の差があり、特に初年次教育においては的外れなレビューが行われるリスクもある。また、他者の成果物にコメントすることや、他者からの批判的コメントの受容に関して抵抗感を持つケースもあり、コメントしあう互恵的な関係についての学習者の理解と納得も必要となる<sup>[8]</sup>。今回の実践では詳細なレビューではなく簡潔な短いレビューを多数のレポートに対して行うことによってこれらの弊を除いている。

## 2. [事例1]「基礎ゼミナールⅠ」

就実大学人文科学部表現文化学科では1年次必修科目として「基礎ゼミナールⅠ」「同Ⅱ」を開講している。本科目は初年次教育の中心をなす科目と位置づけられており、学科1年次生を10名程度のクラスに分割し、学科専任教員が担当している。主として大学生活で必要になるスタディースキルを獲得することを目的とし、論理的思考 (logical thinking) やレポートの書き方 (academic writing)、プレゼンテーション力 (presentation skills) 等を育成する内容である。

筆者が担当する「基礎ゼミナールⅠ」は受講者10名で情報教室でパソコンを前にして授業を行い、毎時間 LMS (Learning Management System) を使いながらインタラクティブな指導を行っている。この授業では中心となるテーマをアカデミック・ライティングに置き、レポート作成の立案から執筆までを段階を踏んで体験していき、最後に1本のレポートが書きあがるという構成になっている。

### 2-1 授業展開

アカデミック・ライティングの学習活動の展開は次の通りである。なお④以降の学習活動がレポートの「二回提出方式」に当たるものである。

#### ①テーマの設定

レポート作成の最初の段階として「調べ学習」と「研究」の違いを学習した。講義によって問題点の発見の仕方を学んだ後、学習者各自は (学科の専門に縛られること

なく)自由にテーマを設定し、その中で問題点を設定する作業を行った。ここではLMSの電子掲示板機能を使って学習者各自のスレッド(電子掲示板における特定の話題ツリー)を設置し、そこに自らのレポートの計画と問題点、ならびに仮説を書きこみ、それに教員がコメントするというオンライン型の個別指導を行った。

今回の実践では、『『ホビット』における指輪エピソードの変更について』といった文学的テーマから、「殉死の要因」といった歴史学的テーマ、「小中学生の携帯電話の必要性」といった社会学的テーマなど多岐にわたる分野のテーマが提出された。ペットとしての犬を取り上げたり、アニメ業界の問題を扱うといった趣味的なテーマも容認することで、アカデミズムへのハードルを下げることを企図した。

## ②調査と検討

次に、学習者は授業時間外の自学自習として、設定した問題点に沿った「調べ学習」を行い、問題設定の妥当性と仮説の当否を検討していく。その過程を電子掲示板に逐一報告し、教員の指導を受ける。こういった繰り返しが「形成的評価」としての意味を持っている。授業ではこれに並行して、論法や段落構成の考え方、出典や参考文献の示し方、引用の作法などの具体的指導を行う。

## ③アブストラクトの執筆

調べ学習を経て、問題提起から検証方法、結論までの計画の全体像が見通せる状態になったら、レポートのアブストラクトを執筆する。これはLMSの課題提出機能を使って、ワープロ文書で提出する。レポート全体の要約文にあたるような短い文章を書くのだが、この段階で全体の論旨の流れも考えることになる。提出されたアブストラクトに対しては教員が形成的評価を行い、コメントを返す。

## ④第一回提出

学習者は、アブストラクトへの教員によるコメントを参考に、実際の執筆を行う。完成したレポートはLMSの課題提出機能を使って提出する。レポートはワープロ文書の形で提出する。分量の目安はおおむね2000字以上3000字以内としたが、厳密に適用してはいない。

## ⑤第一回ピアレビュー

提出されたレポートは教員がpdf化して電子掲示板の個々の学生のスレッドに投稿し、全員が読める状態にする。授業で学習者は、自分以外の受講者のレポートを読んでその筆者のスレッドに匿名でレビューを書き込むことを要求される。レビューは短く書き込み、なるべく多くのレポートを読むことが推奨される。

ピアレビューにあたって教員は、「これはレポートの改善のためのレビューである」ということを強調し「予定調和的な褒め合い」にならないように特に注意を与えた。2-2に示すアカデミック・ライティングのチェックポイントを示し、レビューに当たっての評価の基準とするよう指示した。その際、レビューすること自体も論理的思考力

の訓練としての意味を持っているということも意識させた。

電子掲示板システムを利用しているので、書き込まれたレビューは即座に誰でも閲覧が可能になる。学生によるピアレビューの後、教員も各受講者のスレッドにレビューを書き込む。

#### ⑥ピアレビューのふりかえり

ピアレビュー終了後、学習者はピアレビューのふりかえりを実施した。ふりかえりはLMSのテスト機能を使い、次の3つの質問に回答する形で行った。

- 問1 他の受講者のレポートをレビューしてみてわかったことや気付いたことを書いてください。(自由文記述)
- 問2 他の人からのレビューを読んで、評価を受ける立場として思ったことを述べてください。また、レビューのアドバイスにしたがって改善しようと思った点についても述べてください。(自由文記述)
- 問3 今日のピアレビューで、他人のレポートの論理を丁寧に追って読むことができましたか。自己評価してください。(4段階から選択)

#### ⑦第二回提出

学習者は自分のレポートへのレビューを読んで、改善提案を取捨選択してレポートの加筆改善を行い、第一回提出の2週間後に第二回目の提出(最終提出)をする。

#### ⑧第二回ピアレビュー

提出されたレポートは、ふたたび教員がpdf化して電子掲示板の個々の学生のスレッドに投稿し、全員が読める状態にする。授業で学習者は、自分以外の受講者のレポートを読んでその筆者のスレッドに匿名でレビューを書き込むことを要求される。このとき教員は、「すでに出来上がった作品へのレビューである」ことを強調し、第一回から良くなった点への評価を主としてレビューするよう指示する。

二回目のレビューには大きな意味がなさそうに見えるが、学習者の事後の感想からは、レビューされる者(reviewee)としては改善の努力を評価してもらえることで達成感を味わえ、またレビューする者(reviewer)としては第一回で辛口のコメントをしたことの「後味の悪さ」を払拭する効果もあるものと言えそうである(この点については本稿では詳述を避ける)。

### 2-2 [資料] アカデミック・ライティングのチェックポイント

上記⑤の段階で、教員は次のようなチェックポイントを学習者に示し、具体的内容を解説した。

○文章の緻密さについて

- ・学術的な文章にふさわしい語句を選択しているか
- ・重要な概念の定義が明確になっているか
- ・文がねじれていないか
- ・体言止めを使っていないか
- ・文と文とのつながりが良く、文意が読み取りやすいか
- ・接続表現が適切に使われているか
- ・引用や注、参考文献が適切に記述されているか。

○構成について

- ・論点がよく整理されているか
  - －いくつのことがらが述べられているか明確になっているか
- ・各段落の役割が明確になっているか
  - －各段落に「統括文」があるとよい
- ・序論と結論が呼応しているか
- ・序論で宣言した事柄が、本論で達成されているか
- ・タイトルが本文の内容を端的に表しているか

○内容について

- ・主張が明確であるか
- ・主張と根拠がずれていないか
- ・主張に対する根拠に説得力があるか
  - －他者の論を引用したり反論したりしている場合、その論を正確に理解しているか。
  - －感情的でないか
- ・着眼点が良い（知的な意味で面白い）か
- ・主張に独自性があるか

このチェックポイントは、太田ら（2012）<sup>[9]</sup> に紹介された、「米国イリノイ州の到達度テスト（学力テスト）の評価法（佐渡島 1998）を元に授業担当教員と助手が作成した」とされる「文章評価基準」を元に簡略化して作成したものである。

### 2-3 効果の分析

本事例では、このような形でレポートの二回提出を行った結果、学習者がどのように行動したかを分析する。

まず、一回目の提出と二回目の提出でレポートの総文字数がどう変化したかを学習者全員について計測した。これは Word の「文字カウント」機能を使い「文字数（スペースを含めない）」の値を単純に比較したものである。

表1 レポートの総字数の増加

学習者	第一回	第二回	増加数	増加率
学習者1	3,289	4,300	1,011	30.7%
学習者2	2,536	3,075	539	21.3%
学習者3	1,746	2,236	490	28.1%
学習者4	2,886	3,321	435	15.1%
学習者5	2,278	2,702	424	18.6%
学習者6	1,958	2,189	231	11.8%
学習者7	1,649	1,820	171	10.4%
学習者8	2,614	2,748	134	5.1%
学習者9	2,219	2,306	87	3.9%
学習者10	2,217	2,222	5	0.2%
平均	2,339	2,692	353	15.1%

一回目の提出で10名の学習者のレポートの文字数の平均は2,339文字だが、二回目の提出では2,692と約350字、原稿用紙1枚弱の増加を見せている。二回目の文字数が一回目よりも減った学習者はひとりもなく（ただし2名は5%未満の微増に留まっている）、増加率の平均は約15%であった。もちろん、レポートの質を文字数で測ることはできないが、少なくともほとんどの学習者が一回目のピアレビューの後で一定の加筆を行っていることがわかる。教員の体感上も、二回目に提出されたレポートの出来栄は一回目に比べて格段に向上しており、客観的数字と符合するものである。ふりかえりの中でも、「人の書いた文章を指摘しながら、『これは自分にも言えるな』という点が見つかった。」という指摘や「自分では気づかなかったことが他人に指摘されることで、発見することができて面白かった。自分で見つけるには限界があると思うので、このようにピアレビューすることはよりよいレポートを作ろうとする上で大切だと感じた。」「大半のレビューから最初の問題提起と結論がずれているとの指摘があった。書いている当時は自分では問題ないと思っていたけど、人からは自分では見えないものが見えるのだということを理解した。」といった記述があり、ピアレビューが学習者にとってレポートを加筆改善するよい刺激・動機付けになっている様子が読み取れる。

次に、学習者1ならびに学習者8について、具体的なピアレビューの内容と加筆改善の概要を紹介する。この二名を抽出したのは、一定（5%かつ100字以上）の文字数の増加がある学習者の中で、増加が最も多かった学習者と少なかった学習者という理由である。

### 2-3-1 学習者1の場合

学習者1は「日本のアニメ制作の現場」に興味を持ち、「日本のアニメーターの人口はここ20年で大幅に減少しており、新人アニメーターの約9割が3年以内に退職している」との事実から、「日本の若手アニメーターがなぜ育たないのか」を問題点に据え、これから

の日本のアニメ業界が何を指すべきかを論じた。

第一回提出では、アニメ業界の事情の調査から、アニメーターの労働環境の劣悪さと我が国のアニメの大量生産の現状を指摘し、海外に仕事が流出する現状を問題にした。

第一回ピアレビューでは、学習者1のスレッドに次のような書き込みがあった。ここでは必ずしも当を得ているとは言えないコメントも含めて全ての書き込みを掲げる（なお、書き込みは明らかな誤字・脱字・冗字等を正し、個人が特定できる記述や改行を整理するなどの若干の修正を加えていることをお断りしておく）。

[ピア1] 問いと答えが対応していました。海外にも目が向けられていて、客観的理解は深まりやすかったと思います。論理の流れも自然だったと思います。

ただ、この論文だと「日本はどうあるべきか」というより、「日本のアニメ業界はどうあるべきか」という問いの方が的確な気がします。専門用語が多く、やや読みづらかったです。注をつけてみてはどうでしょうか。

[ピア2] アニメの現状がよく分かりました。新連載のアニメが深夜放送ばかりなのは、DVD 販売目当てと知り驚きました。

3、現在の～・・・の項目に「プロプロダクション工程」とありますが、これは「プリプロダクション工程」と記述したかったのですか？誤字だと思いました。

早急な対策を講じるとありましたが、具体的にはどのような対応をすればよいか記述したほうが説得力が上がると思います。

[ピア3] アニメが現代どのような問題を抱えているかが分かりやすかった。アニメのことをよく知らないので少し難しいとも思った。

[ピア4] アニメーターの現状はとても詳しく分かりやすかった。ただもう少し自分の意見とか問題提起とか欲しいかもしれない。

[ピア5] アニメについて全く知識はないけれど、分かりやすかったです。理由も細かいところまで調べられていてよかったです。

[ピア6] 若手アニメーターが育たない理由、アニメ産業の問題点などははっきりとわかる内容であった。結論もしっかりと書かれている。

だが、序論で書かれるべき疑問点が少しはっきりしない。日本はどうあるべきかというよりもタイトルをそのまま持ってきたほうがよいのではないかと思う。

〔ピア7〕日本の若手アニメーターが育たないという問題から、レポートを書いたことがしっかりわかりました。論理的な説明がとても素晴らしいと思います。けれども、最初の問題提起に対して、どこからがその答えになっているか、はっきりわかりません。(中略) また、どこからどこまでが筆者の意見かがわからないところあると思います。引用の部分を明示すべきだと思います。(後略)

〔教員からのコメント〕論理的展開はかなりしっかりしています。ただ、結論が甘い。アニメの本数を厳選する、というのはどうすると可能になるのか？ 韓国のいいところを取り入れる、というのは具体的に何をとり入れるのか？ そのあたりを明確に書くと、俄然強い論になります。

これを受けて学習者1は第二回提出では、次のような加筆改善を行っている。

- ① 第一回提出では文末に参考文献リストがあるだけだったが、第二回提出では文中の10箇所注に注を施し、どの部分の記述をどの参考文献に拠ったかを明示した。
- ② 韓国のテレビアニメの制作体制の整備ぶりを述べる部分で数値を挙げて客観性を増した。
- ③ アニメがヒットしたことで原作の売り上げも伸びた事例を取り上げ、一作一作に労力をかけて丁寧に作り込む制作姿勢が成功作を生むということを論じた。

①はピアレビューの1・7番、②、③はピアレビューの2・4番と教員コメントに反応した結果であることがわかる。この学習者は、予定調和的なコメントも混ざる中で、受け入れるべき指摘を正確に把握して加筆を行っている。ピアレビューのコメントに質のばらつきがあっても、学習者は適正なフィルターをかけて受容することができている。

### 2-3-2 学習者8の場合

学習者8は「死刑制度」に興味を持ち、死刑を廃止した国では犯罪は増えたのか減ったのかという疑問から海外の事情を調べたうえで、「日本の死刑制度がどうあるべきか」について考察した。その結果、死刑は犯罪の抑止になっていないこと、日本の死刑存置論には明確な根拠があると言い難いことなどから、日本も死刑制度を見直すべきと結論付けた。学習者8のレポートに対するピアレビューのすべてを下に掲げる。

〔ピア1〕死刑制度について興味のわくような文書でした。死刑制度廃止したほうが良い理由についてよく書かれていました。



〔ピア2〕 問題提起の仕方が良かった。明確なものがないと、結論がなんかもやもやする

〔ピア3〕 死刑に関する問題点をさまざまな資料を使い、調べて述べているのが良いと思った。

日本が死刑を廃止しない理由はわからなかったが、では、なぜ自分は死刑に賛成していたのかということも書いたらいいのではないかと思った。

〔ピア4〕 死刑廃止国が殺人発生率が高い（引用者注：これは誤読）のであれば、死刑制度が抑止力になっているという証明なのでは？ 死刑廃止前のデータと照らし合わせた結果があったほうがよいと思われる。

参考文献、参考資料からの引用例がわかりやすく、読んでいて内容がよく把握できる。

〔ピア5〕 死刑を廃止すべき理由が詳しく挙げられていてわかりやすかった。自分が死刑を廃止すべきだと思う理由についても読みやすかった。

〔ピア6〕 問いに対する答えを無理に挙げるのではなく、「わからない」と明示してあるのが良いと思いました。論理の流れも自然だったと思います。

気になったのは、「文字数の都合上」という言葉です。確かにその通りなのですが、それは読者には関係ないことですよね。なので、今回は割愛する。ぐらいいの表現で良いのではないのでしょうか？

また、最後のあたりに個人的な感想が多いのも論文としてはちょっと違うかな、と思いました。あまり感想は書かないほうが良いと思います。

〔教員からのコメント〕 かなりの力作だと思います。

「たくさんの存置論が見つかった」と書いているが、代表例を引用すべき。

「明確な根拠のあるものはない」と言い切っているが、それでは読者への説得力にならない。実際に明確な根拠のない言説をいくつか引用してみせる必要がある。

これを受けて学習者8は、二回目の提出では主として次のような加筆を行っている。

- ① 日本で死刑制度の存否を問うような調査は行われたことがないことの指摘。
- ② 日本の死刑存置論は「日本人の多くは死刑制度の存続に賛成している」との根拠のない前提で語られている、との指摘。
- ③ 自分がこれまで死刑制度に賛成であった理由の明記（「被害者や被害者の遺族に対する一番の償いは加害者が死ぬことだと思っていた」）。

①、②は日本の死刑存置論の客観的論拠の不足について論旨を強化したもので、ピアレビューの2・6番や教員のコメントに反応したものである。③はピアレビューの3番に対応した修正である。

このように、学習者8においても、玉石混淆のコメントのうち、反応すべきものとそうでないものを正しく峻別し、二回目の提出に活かしていることがわかる。

### 3. [事例2]「情報と文化」

「情報と文化」は総合教養教育科目の一つで、人文科学部・教育学部の全学年の学生が受講可能な選択科目である。情報検索を中心とし、主として情報の受信と利用に関する知識と技能を学習する。授業は情報教室で行われ、パソコンを操作しながら学習をおこなう。この授業では主たる課題として「パスファインダー」の提出を課している。パスファインダーとは、特定のテーマに関する情報の調べ方を解説し、資料を紹介したガイド文書で、図書館などで利用者に提供されることが多い。図書館の作成するパスファインダーでは主として当該図書館の蔵書が対象になるが、この授業で作成するパスファインダーではネット上の情報と書籍、新聞等の各種情報源を広く扱うこととしている。これは特定のテーマについてのインターネット上の情報を書籍等と比較することで、実践的なメディアリテラシーを獲得することを狙ったものである。パスファインダーを作成する過程で受講者は、情報検索の技能を駆使して上質な情報源を探す作業を繰り返すこととなる。これは情報検索の技能の習得のみならず、情報の質の評価や情報発信者の属性の検討など、信頼性の高い情報を得るための実務的な見識を得るための訓練となる。

パスファインダーのテーマとしては「日本女子バレーボールについて」「スウエーデンについて」「惑星の不思議（小学生向け）」「岡山県に生息するホタル」「学校におけるいじめの現状（教師になる人のために）」「日本の妖怪について」など、スポーツ、動物、教育、文化など多岐にわたっている。内容は、テーマの概説、検索キーワードの紹介、検索方法をの解説、関係の Web ページやオンラインデータベース、書籍、新聞それぞれの優れた情報源のコメント付き紹介などである。また、図書館が作成するパスファインダーにない要素としては、当該テーマの分野における、ネット・書籍・新聞のそれぞれのメディアから得られる情報の質の違いを解説することである。

#### 3-1 授業展開

パスファインダー作成の学習活動の展開は次の通りである（〔事例1〕と同様の部分は詳述を避ける）。なお〔事例1〕同様④以降の学習活動がレポートの「二回提出方式」に当たるものである。

##### ①テーマの設定と検討

学習者はLMS上の電子掲示板に各自のスレッドを作成し、パスファインダーで扱い

たいテーマを書き込む。教員はテーマの妥当性等についてオンラインで個別指導を行う。

## ②作成の計画

学習者は設定したテーマについて予備的に検索を行い、ネット、書籍、新聞等でそれぞれのどのような情報が得られるかを確認し、作成の見通しを立てる。見通しが立たない場合はテーマを再考する。

## ③情報収集と取捨選択（自習報告）

テーマが固まったら図書館とインターネットを使って実際の情報収集と情報源の評価、取捨選択の作業を行いながら、実際にパスファインダーを執筆していく。この作業が最も時間のかかる学習活動であり、授業時間中にも教員に相談しながら作業のできる時間を設定するが、主として各自の自習の形で行われる。自習によって作業を進めた学習者は、LMS の日誌機能を使って「自習報告」を行い、教員はそれを平常点評価する。この指導過程は、提出期限直前の「一夜漬け」的な作業を防ぐ意味を持っている。また、この学習活動と並行して、パスファインダー作成上の注意事項やリソース（出典）の示し方などの講義も行う。

## ④第一回提出

学習者は LMS の課題提出機能を使い、Word 文書のパスファインダーを提出する。

## ⑤第一回ピアレビュー

〔事例 1〕と同様に LMS 上の電子掲示板に pdf 化したパスファインダーをアップロードし、それを互いにレビューする。その際 3-2 に示す評価の観点を考慮することとした。なるべく多くのレビューを書くことが推奨されるなどは〔事例 1〕と同様である。

## ⑥第二回提出

学習者は自分のパスファインダーへのレビューを読んで、採用すべき改善提案を採用して加筆改善を行い、第一回提出の 2 週間後に第二回目の提出（最終提出）をする。

## ⑦第二回ピアレビュー

第一回ピアレビューと同様に LMS 上の電子掲示板に pdf 化したパスファインダーをアップロードし、それを互いにレビューする。〔事例 1〕と同様、教員は学習者に、第一回からの改善点に注目したレビューを行うよう指示する。

## ⑧ピアレビュー後のふりかえり

ピアレビュー終了後、学習者はピアレビューのふりかえりを実施する。LMS のテスト機能を使い、3-3 に掲げる 2 つの質問に回答する形で行った。

### 3-2 [資料] パスファインダーの評価の観点

#### 内容の過不足

- ・ テーマの「概要」を解説していますか？
- ・ 「キーワード」を列挙・解説していますか？
- ・ 「メディアによる特性の違い」を項目を立てて説明していますか？
- ・ いくつかのサブテーマに分けて、リソースを示していますか？
- ・ 全てのリソースについて内容の概説をしてありますか？
- ・ リソースの示し方は指定された要件を満たしていますか？

#### 客観性

- ・ 自分のオリジナルな情報発信になっていませんか？
- ・ 調べものガイドとしての「公正中立」に配慮していますか？ 採用したリソースに著しい偏りはありませんか？
- ・ テーマの世界を網羅するだけのサブテーマが設定できていますか？

#### 独自性

- ・ テーマをキーワードにしたとき、Google 検索結果上位のリソースばかりを紹介していませんか？
- ・ 書籍は実際に現物にあたって評価していますか？
- ・ 各リソースの評価コメント（概説）を「コピペ」で済ませていませんか？

### 3-3 第二回ピアレビュー後の「ふりかえり」の検討

第二回のピアレビューのあとで行ったふりかえりの中で、学習者は次の二つの質問に自由文記述で回答している。それぞれの記述の中に、共通する指摘事項が含まれるものの数（人数）を集計したものが下の表2、ならびに3である。

問1 今回、2回のピアレビューをして、他の受講生の提出物をたくさん読む機会を持ちましたが、この経験はあなたにとってどんな意味を持ったと思いますか。この経験から気づいたことや得たものがあれば書いてください。

表2 「問1」への回答

(回答者数37)

指摘事項	指摘者数	指摘率
他人のレポートを見ることで自分の改善点に自ら気付けた	13	35.1%
他の学習者から良い指摘をうけた	12	32.4%
他人のレポートが手本・参考になった	6	16.2%
他人のよくできたレポートを読むことで発奮材料になった	5	13.5%
人の個性・多様性に気付いた	4	10.8%
その他の指摘（指摘者各1名のもの）	12	32.4%

他の学習者から自分のレポート（パスファインダー）の改善点についての適切な指摘を受けたという意味のことを述べている学習者が約1/3いるが、指摘は受けていなくても他の学習者のレポートをレビューすることで自分のレポートの問題点に気づくことができた、と述べる学習者、他の学習者のレポートを手本にして自分のレポートを改善できたという学習者、さらに他の学習者のよくできたレポートが発奮材料になったという意見も多かった。それらを合算すれば、なんらかの「間接的な効果」を指摘する学習者はのべ24（実数20）人おり、実数において過半を占めている。ピアレビューはレビューされる者（reviewee）への効果もさることながら、レビューする者（reviewer）自身の気づきにつながる部分が大いことが読み取れる。

問2 このように、ピアレビューを経てレポートを2回提出するやり方についての感想を述べてください。1回だけ提出の場合に比べて、あなたの学習の質や量は向上していると思いますか？

表3 「問2」への回答（回答者数37）

指摘事項	人数	指摘率
良いレポートになった	24	66.7%
いい指摘をもらった	22	61.1%
十分よくなったとは言えない	6	16.7%
他人のレポートから自分の問題点に気付けた	5	13.9%
自分のレポートを見直せた	5	13.9%
積極的に取り組めた	3	8.3%
他人のレポートが良い刺激になった	2	5.6%
自分のレポートに自信が持てた	2	5.6%
二回提出なので一回目をいい加減にやってしまった	2	5.6%
その他の指摘（指摘者各1名のもの）	3	8.3%

「二回提出方式」の感想として「結果として良いレポートになった」という意味のことを明示的に記述した学習者が全体の2/3にのぼっている。

ただし、二回目の提出物が「十分によくなったとは言えない」という意味のことを記述した学習者も6名おり、これらの記述を見ると「良い指摘はもらったが、他のレポート提出などと時期が重なり、十分に改善のための時間が取れなかった」というような理由が書かれている。また少数意見ながら「二回提出なので一回目をいい加減にやってしまった」と正直な告白をしている学習者もあり、この二回提出方式には「二回のうちのいずれか一回について手を抜いてしまう」という問題点が指摘できる。

#### 4. まとめ

以上、2つの授業での実践を記述してきたが、ピアレビューを導入した期末レポートの「二回提出」方式は、総括的評価の評価材であったレポートを形成的評価に役立てることができ、多くの学習者にとってレポートの質、すなわち学習効果の質の向上につながる有効な方法であると言えるだろう。また、論文の査読のごとく少数のレポートを詳細にレビューするのではなく、できるだけ多くの学習者のレポートをレビューすることで、「人のふり見て我がふり」を直す効果や、優れたレポートに接して参考にしたリ発奮したりする効果も期待できる。

今回のピアレビューの後で行ったふりかえりの中で、「こういう機会はめったにないので、本当によかったと思います。」「自分以外の人課題を評価したり、評価してもらったりという機会はなかなかないので貴重だったと思います。」といった記述が散見された。本学の授業の中で、他人のレポートや提出物の中味を見る機会が少ない現状がうかがえる。他人のレポートを数多くレビューするという学習活動の導入は、多くの授業において検討されるべきではないだろうか。

#### 出典・参考文献

- [1] ブルーム他, 渋谷憲一・藤田恵璽・梶田叡一訳, 『教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総括的評価—』. 第一法規出版, 1973.
- [2] ブルーム他, 渋谷憲一・藤田恵璽・梶田叡一訳, 『学習評価ハンドブック〈上・下〉』, 第一法規出版, 1974.
- [3] 森正樹・金西計英・松浦健二・光原弘幸・矢野米雄, 学生同士のピアレビューに着目した共同レポート作成システムの構築, 電子情報通信学会技術研究報告 ET 教育工学 106(364), pp. 83-88, 2006.
- [4] 金西計英・松浦健二・光原弘幸・矢野米雄, 学生間の相互評価を活用するグループレポートシステムの構築, 電子情報通信学会技術研究報告 ET 教育工学 108(146), pp.33-38, 2008.
- [5] 藤原康宏・大西仁・加藤浩, 学習者間の相互評価に関する研究の動向と課題, メディア教育研究 4(1), pp.77-85, 2007.
- [6] 藤原康宏・大西仁・加藤浩, 公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価: 学習成果物を相互評価する場合に評価者の選択で生じる「お互い様効果」, 日本教育工学会論文誌 31(2), pp.125-134, 2007.
- [7] 藤原康宏・永岡慶三, グループワークを取り入れた演習における学習者間レポート相互添削の実践, 電子情報通信学会技術研究報告 ET 教育工学 110(312), pp.65-70, 2010.
- [8] 山内・古屋 (2013): 山内薫・古屋憲章, 学習者は「レポート検討」をどのように体験していたか: 「振り返り」談話データおよびインタビューデータの質的分析から, 言語文化教育研究 11, pp.190-203, 早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究

会,2013.

- [9] 大田裕子・佐渡島紗織・富永敦子・齋藤 綾子, 大学初年次日本語アカデミック・ライティング授業における帰国生と留学生の文章力: 初回課題と最終回課題の文章評価調査から, 国際教養学部紀要 第8号, pp.337-375, 早稲田大学国際教養学部,2012.